☆年間第23主日（9月4日）の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（知恵の書 9 章 13-18 節）

　神の計画を知りうる者がいるでしょうか。主の御旨を悟りうる者がいるでしょうか。死すべき人間の考えは浅はかで、わたしたちの思いは不確かです。
朽ちるべき体は魂の重荷となり、地上の幕屋が、悩む心を圧迫します。
地上のことでさえかろうじて推し量り、手中にあることさえ見いだすのに
苦労するなら、まして天上のことをだれが探り出せましょう。
あなたが知恵をお与えにならなかったなら、天の高みから聖なる霊を遣わされなかったなら、だれが御旨を知ることができたでしょうか。
こうして地に住む人間の道はまっすぐにされ、人はあなたの望まれることを学ぶようになり、知恵によって救われたのです。

第二朗読（使徒パウロのフィレモンへの手紙 9-10, 12-17 節）

　愛する皆さん、年老いて、今はまた、キリスト・イエスの囚人となっている、このパウロは、 監禁中にもうけたわたしの子オネシモのことで、 頼みがあるのです。 わたしの心であるオネシモを、あなたのもとに送り帰します。 本当は、わたしのもとに引き止めて、 福音のゆえに監禁されている間、 あなたの代わりに仕えてもらってもよいと思ったのですが、 あなたの承諾なしには何もしたくありません。 それは、あなたのせっかくの善い行いが、強いられたかたちでなく、 自発的になされるようにと思うからです。 恐らく彼がしばらくあなたのもとから引き離されていたのは、 あなたが彼をいつまでも自分のもとに置くためであったかもしれません。 その場合、もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、 つまり愛する兄弟としてです。 オネシモは特にわたしにとってそうですが、 あなたにとってはなおさらのこと、 一人の人間としても、 主を信じる者としても、 愛する兄弟であるはずです。
だから、わたしを仲間と見なしてくれるのでしたら、 オネシモをわたしと思って迎え入れてください。

福音朗読（ルカ 14 章 25-33 節）

　そのとき、大勢の群衆が一緒について来たが、 イエスは振り向いて言われた。「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、 父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、 これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。 自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。 あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、 造り上げるのに十分な費用があるかどうか、 まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。 そうしないと、土台を築いただけで完成できず、 見ていた人々は皆あざけって、『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。 また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、 二万の兵を率いて進軍して来る敵を、 自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、 まず腰をすえて考えてみないだろうか。もしできないと分かれば、 敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、 和を求めるだろう。 だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

　ようやく涼しくなり始めましたね。ひと月前とは 7 度ぐらいの差でしょうか。でもまだ大型の猛烈な台風が控えていますので、大きな災害が起こらないように祈りましょう。

　さて今日の主日は「被造物を大切にする世界祈願日」です。創造主である神様がその慈しみをもって創造された宇宙万物を私たちへの贈り物として理解し、大切にすることを誓う日でもあります。今世界では SDGsすなわち持続可能な世界の開発を目指して動いています。それには私たち一人一人が意識して生活することが大切なのです。どんなに小さな生き物であってもそこには神様の大きな愛が宿っているのです。さて今日のミサの朗読ですが、何を語っているのでしょうか。集会祈願では「私たちの救いのためにイエスは十字架を担ってくださった」とあります。

第一朗読　（知恵の書 9 章 13-18 節）

　ものごとを知る知恵、特に神のみ旨を知り理解する知恵が与えられるように祈る言葉が語られています。「人間の考えは浅はかで、思いは不確かです」という言葉はまさに今の私たちの世界の現実です。AI に頼る世界も一日の天気すら容易に把握できないのです。ましてや神の計画、主のみ旨をどうして推し量ることが出来ましょうか。しかし主なる神はその御子を救い主として与えられ、その知恵をもって人の道を教えてくださるのです。この知恵の書では救い主が知恵として与えられることを教えてくれています。神の知恵を知る始めは目の前の被造物をよく見ること、大事にすることから始まります。花や昆虫、動物など多くの生き物など、そして物言わぬ自然界の多くの物質、岩や金属その他の物質、これらは神の知恵を教えてくれる大切なものなのです。

第二朗読（使徒パウロのフィレモンへの手紙 9-10, 12-17 節）

　この手紙はとても短いもので、個人的な内容が含まれています。オネシモという人はフィレモンという人の奴隷であったようですが、何かのことでパウロの世話にあたっていたようです。パウロはこのオネシモのことでフィレモンに頼みの手紙を書いているようです。奴隷としての身分ではなく、主を信じるものとして、愛する兄弟として受け入れてくださいと願っています。主を愛する兄弟であることはこの世界のあらゆる制度、人種、習慣、身分を超えるものであるとパウロは述べているのです。私たちも言葉の違い、肌の色の違い、性別の違い、習慣の違いを超えて主の兄弟であることを生き方として示していけるように努力しましょう。

福音朗読（ルカ 14 章 25-33 節）

　今日の福音は「イエスに従う」ことです。多くの人々が旅をつづけるイエスに従ってついてきていました。それはパンを増やした奇跡や、病人を癒した

奇跡や悪霊を追い出されたイエスを見たからでした。この人に付いていけばきっといいことが味わえるかもしれないという単純な理由からだったと思います。その人々に対しイエスははっきりと言われます。「自分の十字架を背負ってついてきなさい」と。自分の十字架とは何でしょう。生活にまつわる困難のことでしょうか。それもあるかもしれませんが、それらを引き起こす自分自身ではないでしょうか。良いにつけ悪いにつけ私自身から逃げることはできないのです。この私自身を受け入れ、受け止めていくことが「私の十字架」ではないでしょうか。私の外に十字架があるのではないのです。この自分自身を良く見つめ、決心してイエスに従うことが必要だとイエスは述べておられるのではないでしょうか。十字架を担いで歩く道にはイエスも十字架を背負って共に歩いてくださっています。

「十字架を担ぐ」（那須ベタニア修道女会にて　2021 年 8 月）

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光